

現場指示場面で使用される「と思う」について

渕田 隆史
(Takafumi FUCHIDA)

【要約】

《目的》医療系専門職養成の文脈において学生への会話指導が重視されているが、コミュニケーション能力（会話能力）の明確な定義はなされておらず敬語等の配慮表現についても検討が不十分である。言語聴覚療法では、セラピー全体が会話的やりとりから成り立っていることもあり、他の医療職よりも高度な会話技法が求められるといえるが学生の会話能力を評価する上で配慮表現について検討することは重要であると思われる。本稿ではポライトネスの観点から、間接表現「と思う」が持つコミュニケーション上の機能について考察する。

《方法》ポライトネス理論の観点から学生の発話断片に見られる「と思う」を考察する。方法としては、臨床実習特論Ⅰ（言語聴覚学科2年生（48名）のロールプレイ場面のビデオ記録のうち間接表現「と思う」が含まれる会話（2分30秒）を書き起こし、当該の表現が使用されている35の発話断片を拾い上げて分析した。学生には授業場면을ビデオ録画すること、および、そのデータを分析し発表する旨を説明し、同意を得た。また発話データから個人が特定されないよう配慮した。

《結果》「と思う」には使用法によって対象者のポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスそれぞれに対応するコミュニケーション機能がある。話し手と聞き手双方を活動に包括することで心理的距離を縮める効果があるとされるポジティブ・ポライトネス・ストラテジーに従い、話し手—聞き手共通の願望という形式（「～したい」）と共に使用される「と思う」、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーに従った習慣的間接表現としての「と思う」である。ただし現場指示場面において話し手の領域をコ系指示詞で指すと同時に、聞き手領域に働きかけるコミュニケーション機能をもつ「と思う」を使用すると聞き手のネガティブ・フェイスに対する配慮表現としては不自然となると考えられた。

《結論》過剰なヘッジ表現（ぼかし表現）の使用は、対象者とのラポールに基づく協力関係の構築には逆効果となることが予想される。

キーワード：コミュニケーション能力 ポライトネス 言語聴覚療法 ヘッジ表現

I. はじめに

1. 概要

医療系をはじめとした専門職養成の文脈において学生への会話指導が重視されており^{1) - 3)}、その中で社会言語学的観点からの敬語の誤用等が話題になることがあるが^{4) - 5)}、養成機関が行うロールプレイやOSCEでの学生の発話面に関する評価項目としては「コミュニ

ケーション」、「会話のスムーズさ」、「適切な言葉づかい」、「対人能力」、「コミュニケーション能力」、「丁寧な言葉づかい」、「平易な言葉」などであり敬語等の配慮表現については十分に検討されていない^{6) - 8)}。

例えば言語聴覚療法では、セラピー全体が会話的やりとりから成り立っていることもあり、他の医療職よりも高度な会話技法が求められるといえるが、ここでの会話技能とは「対象者への配慮を適切に示す言語運

用技法」という意味で用いる。医療系分野で求められる会話技能を学生に指導するためには、学生の発話面に関する適切な評価項目を立てることが重要であるが、その方向性の一つとして学生の発話に見られる敬語等の対人配慮表現の使用の実際を調べることは有用である。

会話相手に対する配慮表現を研究する分野としてポライトネス理論があるが^{9) - 12)}、本稿ではこの理論を援用し学生の使用する配慮表現について検討した。具体的には授業の中で行われたロールプレイ場面の一部を分析素材としたが、学生の発話断片には「お名前のほうおっしゃって頂けますか」、「〇〇さんでよろしかったでしょうか」、「こちらが〇〇になります」といったいわゆるバイト敬語が多く散見された。これらは日本語使用における経験知識から誤用表現として捉えることもできるが^{13) - 14)}、ポライトネスの観点からすれば対象者への配慮から選好された表現であると捉えることが可能なものが含まれる。この中で、本稿ではこれまで敬語表現の誤用例として検討されることのなかった間接表現「と思う」を扱い、この表現がポライトネス・ストラテジーとして機能する例と結果的に不自然となる例について考察した。

2. 理論的背景① (ポライトネス理論)

Brown & Levinson⁹⁾ によって確立されたポライトネス研究の対象は丁寧語や敬語表現に限定されるものではなく、人間関係を円滑に形成・維持するための「他者への配慮」としての言葉づかいの研究である^{9) - 12)}。

日常会話において相手に配慮することはごく当然に行われているが、「話し手と聞き手がお互いに気持ち良く会話をする」ための原理をポライトネス理論として学問的に定式化した点で意義深く、日々の言語運用が単に情報伝達の効率性を重視した行動であるのみならず、場面や状況といった社会言語学的な要素と密接に関わる複雑な行動であることがより明らかになったと言える。

Brown & Levinson⁹⁾ は「フェイス (面子)」という概念を使用し、対人コミュニケーションにおける人間の欲求をポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスに二分している。ポジティブ・フェイス (親近欲求) とは他の会話参与者から理解され、共感され、称賛され接近したいという欲求であり、ネガティブ・フェイス (不可侵欲求) とは反対に立ち入られたくな

い、礼儀正しく接して欲しいという欲求である。会話においては他者との一体感を望む気持ちと距離を置きたいという相反する気持ちが存在し、これらのフェイスを侵害する可能性のある行為は F T A (face-threatening act) と呼ばれている。F T A を回避するための言語方略をそれぞれ 2 種類の基本的欲求に対応させてポジティブ・ポライトネス・ストラテジー、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーと呼ぶが、我々は場面ごとに相手のいずれかのフェイスへの配慮を優先させつつ「お互いの距離を縮めたい時にはポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを優先、心理的距離を保ちたい時にはネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを優先」といった具合に使用する言語形式を選択・調整しているといえる。

医療コミュニケーションの領域全般において求められるコミュニケーションのあり方についてポライトネス理論と関連付けた研究に吉岡ら^{4) - 5)} があるが、こうした社会言語学的アプローチは患者と医療従事者が情報を共有し、ラポールに基づく協力関係を築き、患者満足度が高く安全で信頼される医療を実践する上で効果的なポライトネス・ストラテジーを明らかにする意味で重要な知見を与えている。これらの研究では同目的のため実際の医療現場で使用可能なポライトネス・ストラテジー・スキルの具体的な応用法が検討されているが、敬語や丁寧表現の適切な使用という観点では扱うことのできなかった「気さくな話し方」や「方言の使用」といったポジティブ・ポライトネス・ストラテジーも他者への配慮表現に含めた検討が可能となった点で意義深い。本稿では言語聴覚士養成校において学生に対し「対象者への配慮を適切に示す言語運用技法」を指導するためには実際に学生が使用する対人配慮表現について検討する必要があるという認識の下、配慮表現の成功例と誤用例を拾い上げて分析したが、これは今後学生の発話面の評価項目の適切化を図るための準備的研究という意味をもつ。

次節では「と思う」についての言語学的先行研究を概観し、その後実際の発話断片の分析を示す。

3. 理論的背景② (「と思う」の言語学的先行研究)

森山¹⁵⁾ は「と思う」を文末思考動詞と呼び、その用法を「不確実表示用法」と「主観明示用法」という語で説明している。「不確実表示用法」とは、その情報が個人的であることを明示することで、その情報が

不確実であるということを示す。「主観明示用法」は、その情報が個人的・主観的なものであることを取って明らかにすることにより、主張を和らげるものであると定義されている。森山¹⁵⁾の挙げる例を以下に示す。

【不確実表示法】

彼はもう大学に来ていていると思います。

【主観明示法】

- a. 日本の医療制度は間違っていると思う。
- b. 乾杯したいと思います。

これに対して小野¹⁶⁾は、「と思う」は不確実表示用法、主観明示用法のいずれも独白などでは用いられないことから、思考活動だけではなく聞き手に対して働きかける談話機能も持つと指摘している。換言すれば「と思う」は聞き手がいなければ成立せず、語用論レベルでは思考動詞としてよりも聞き手目当てのコミュニケーション機能を持っているという主張である。また小野¹⁷⁾では「と思う」には聞き手の知識領域を述べるような、話し手にとって不確実で断定するに足りない知識状態を示す機能（思考動詞としての認識レベルの側面）があり、この機能をコミュニケーションレベルで捉えなおすと聞き手に積極的に同様の思考を求めたり、あるいは聞き手に思考・判断を求めるといふ、聞き手の持つ知識への働きかけが観察されるとしている。小野¹⁷⁾の挙げる例を以下に示す。

- a. 筑波大学に行きたいんですが。
- b. 筑波大学に行きたいと思うんですが。

a. では道順やバスの番号などという思考・判断を伴わない情報提供を聞き手に対して要求しているのに対して、b. では話し手の進路や専門性に関わる情報提供を要求しており、これは聞き手の知識領域にアクセスし思考・判断を含む情報提供を要求しているものであると言える。

また、小野¹⁸⁾では森山¹⁵⁾の挙げたb.の例について、「乾杯したい」は話し手の主観で自分自身の領域だが、聞き手にも「いっしょに乾杯することを望んでおり、聞き手に話し手の明示された主観を行動してもらいたいという主張であるから作用領域が聞き手にも及ぶため、主張を和らげる配慮として「と思う」が使用できるという解釈が加えられている。

以上から「と思う」の持つ3つのコミュニケーション機能、すなわち①「と思う」は聞き手が存在しなければ使用されないこと、②話し手にとって不確実で断定するに足りない知識状態を示すことで聞き手の知識に働きかけ、聞き手の思考・判断を求めるといふ機能があること、③話し手自身の領域であっても聞き手に作用領域が及ぶ場合には「と思う」を使用できること、をふまえ実際の「と思う」が含まれる発話断片について分析する。

II. 方 法

目白大学言語聴覚学科2年生の臨床実習特論Ⅰの授業内で行われたロールプレイ場面（2015年6月10日、17日実施）のビデオ記録（48名分）のうち間接表現「と思う」が含まれる2分30秒の会話を書き起こし、当該の表現が使用されている35の発話断片を拾い上げて分析した。

ロールプレイのシナリオは学生が教員の演じる健常高齢者（模擬）に対し、折り紙の兜の折り方を教示と一緒に折り進めるという内容である。分析方法にはポライトネス理論を援用し、学生が発話断片内で使用する「と思う」をBrown & Levinson⁹⁾の示すポライトネス・ストラテジーの分類方法に基づいて2つに分類した上で「と思う」が持つ配慮表現としてのコミュニケーション機能について検討した。

学生には授業場면을ビデオ録画すること、および、そのデータを分析し発表する旨を説明し、同意を得た。また発話データから個人が特定されないよう配慮した。

III. 結 果

1. 学生の発話に見られる「と思う」①（ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして機能する例）

以下に示す分析場面は目白大学言語聴覚学科2年生の臨床実習特論Ⅰの授業内で行われたロールプレイの一部である。ロールプレイの内容は、学生が教員の演じる健常高齢者（模擬）に対し、折り紙の兜の折り方を教示と一緒に折り進めるといふものである。

本稿ではこれまでの敬語の誤用研究では扱われていない間接表現「と思う」を取り上げ、ポライトネス理論の観点からその使用に認められるコミュニケーション

ン機能としての成功例と失敗例について考察するため当該表現を含む発話断片のみを分析対象とした。以下ではまずロールプレイの導入部での説明で使用される「と思う」の例を示す。

【実施する内容の説明】

- 1) 前回に引き続き、兜を折っていきたくと思います
- 2) これを今回は完成させたくと思います
- 3) 本日は前回途中になってしまった兜を折っていきたくと思います
- 4) 今日は兜を完成させたくと思います
- 5) 今日は前回途中まで作った兜を作っていきたく思います
- 6) 本日は前回まで作った兜を完成させたく思います
- 7) 前回終わらなかったなので今回はその途中から始めたく思います
- 8) 本日は兜の折り紙の続きをしたいと思います
- 9) 本日は前回途中まで折った兜を完成させたく思います
- 10) それでは本日、前回途中まで折りました兜の続きの折り紙をしたいと思います
- 11) 前回折りました兜の続きを折っていきたく思います
- 12) 兜の続きを折ろうと思います
- 13) 次に兜の角を折りたいと思います
- 14) 今回こちらの兜の完成を目指して続きを折っていきたく思います
- 15) 今回は前回の続きから兜を完成に向けて折っていきたく思います
- 16) 兜の続きを一緒に完成させていきたく思います
- 17) 兜を完成させたいと思っています
- 18) 今回は前回に引き続き折り紙で兜を折っていきたく思います
- 19) 今回は前回に引き続き兜を完成させたい思います

1)～19)の発話断片に含まれる「と思う」は引用節の内容が話し手(学生)にとって不確実でなく自身の領域の事柄であるから、前節で見た3つのコミュニケーション機能のうち③に該当すると考えられる。聞き手に対し一緒に折り紙を折ってほしいと望んでい

るため作用領域が聞き手にも及ぶことから、指示という言語行為を緩和させる機能である。また対象者に対して協力を依頼するという内容が指示的なニュアンスを含むことを回避するため、学生＝対象者という一人称複数形の動作主を設定し、「これから兜の続きを折る」という行為を話し手―聞き手が共有する願望という形にしておき、さらに「と思う」を付加することで聞き手にも作用領域が及ぶことを強調していると分析することも可能であろう。

あるいはBrown & Levinson⁹⁾の挙げるポジティブ・ポライトネス・ストラテジーに照らし合わせれば、Strategy 12: Include both Speaker and Hearer in the activityに該当するが、これは話し手と聞き手双方を活動に包括することで心理的距離を縮める効果があるとされるものであり、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとしてよりも聞き手の「協力要請に応えて話し手と一体化したい」というポジティブ・フェイスへの働きかけが大きくなったポライトネス表現と捉えられる。

以上、通常は思考動詞として使用される「と思う」は上述のように配慮表現としてのコミュニケーション機能を持つことを示したが、次節ではネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとしての効果を期待し、Brown & Levinson⁹⁾の挙げるStrategy 1: Be conventionally indirectに該当するような習慣的間接表現を用いながらも話し手の現場指示場面にある対象について「と思う」を使用すると結果的に不自然な表現となる例を示す。

2. 学生の発話に見られる「と思う」②(ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとしての誤用例)

以下の発話断片は、Ⅲ-1.で見た導入部の説明後、学生と模擬対象者が向かい合って座り、お互いに1枚ずつ折り紙を手に行っている場面のものである。学生が折り方を口頭で教示し、自分の折り紙を手本として模擬対象者に見せながら一緒に兜の完成を目指すというロールプレイが進行している。視線に関して言えば、学生による教示が行われている間は学生、模擬対象者ともに学生が模擬対象者に向けて提示している折り紙を見ており、模擬対象者はこの手本と自身の折り紙を見比べながら折り進めるという状況である。つまり学生の持つ折り紙は模擬対象者の折り紙よりも常に一工程先の段階にあり、以下の発話断片は学生がこの手本

としての折り紙の状態について言及している部分であって模擬対象者の折り紙の状態に言及しているものではない。

【折り方の教示】

- 20) 開ける角があると思うんですけれども
- 21) こちらに跡がついていると思うので
- 22) ここ、開いていると思うんですけど
- 23) ここに折目がついたと思うんですけど
- 24) 下側に2枚びらびらがあると思うんですけど
- 25) 三角の角が2つあると思います
- 26) 下に少し余った部分があると思うので
- 27) 折目が付いたと思うので
- 28) びらびらした部分が下に2つあると思うので
- 29) 下に2枚折り紙があると思いますので
- 30) 紙が2枚あると思いますので
- 31) ここに三角形があると思うので
- 32) ここに線ができたと思うので
- 33) 上にひらひらした部分が2個あると思います
- 34) べらべらしていると思うので
- 35) 角が2つわかれていたと思います

これらの発話断片における「と思う」は「(話し手の) 知識を押し付けられたくない、一方的に指示されたくない」といった聞き手のネガティブ・フェイスが想定されたストラテジーであると推測できるが、引用節内の内容は話し手―聞き手両者が眼前で共有する客観的事実であり、これを話し手の主観叙述で表現しているところにまず不自然さがあると考えられる。森山¹⁵⁾によればこれは「思う」の主観明示用法ととれ、話し手の主観的な主張であることを明示することで叙述内容を和らげるようなある種のモダリティ形式の機能を持っている。しかし、話し手自身が実際に手で持っており、話し手―聞き手ともに今、ここで知覚している同一の折り紙の状態を話し手の不確実な知識状態として示し聞き手の知識に働きかけるのは不自然であるし、むしろ「話し手には見えている折り紙の状態を聞き手が同じように正確に知覚できているかどうか疑問である」というF T Aとしてのメッセージを送ってしまう可能性も否定できないだろう。

また、もう一つの分析視点として「と思う」と共起しているコ系の指示詞の現場指示用法に注目してみると、21)、22)、23)、31)、32)の各発話断片では話

し手が折り紙を自分の領域のものとして直示的(deictic)に指示していながら、コミュニケーション機能としては聞き手の領域に働きかける間接表現「と思う」を付加しているために不自然となっているという説明が可能となる。

現場指示(眼前指示、ダイクシス)とは話し手と聞き手が同一空間に存在する場面において対象をコ・ソ・ア系の指示詞を用いて指示する用法である。コ・ソ・アを中心とした日本語の指示詞研究については、佐久間鼎¹⁹⁾がコ系の語で指示する自分(わ)のなわばりとソ系の語で指示する相手(な)のなわばり、ア系の語で指示するそれ以外の領域とした人称区分説に始まり、話し手と対象との距離によって「これ(近称)、それ(中称)、あれ(遠称)」と区別されるとする服部²⁰⁾などの距離区分説、話し手の心的領域を「直接経験領域」と「間接経験領域」に分け、コ系とア系は直接経験領域、ソ系は間接経験領域を指すとする金水・田久保²¹⁾の解釈などがある。現場指示用法については聞き手の縄張りをどう位置付けるかといった議論があるが、コ系が話し手の領域(話し手が現在働かせているもの、あるいは処理中のもの)を指すという点では研究者間の解釈にあまり差がない。

学生の発話断片21)、22)、23)、31)、32)が産出された状況についてもう一度確認すると、話し手(学生)は聞き手(模擬対象者)の方に向けて手で持っている折り紙をコ系の指示詞で自身の領域内のものとして指示しており、聞き手も同一の折り紙を見ているという場面である。実際には使用されていないが21)、22)、23)、31)、32)以外の発話断片も話し手が自分自身で持っている折り紙の状態について言及しているためコ系の指示詞が潜在すると考えられる。

この折り紙の状態は話し手―聞き手ともに知覚しているのであるから、本来は話し手が思考動詞「思う」を使用して主観的情報として扱うことに不自然さがあると考えられるが、指示語の現場指示用法を用いて自身の領域を指示しながら、間接表現「と思う」によって聞き手の領域を指示する形となっていることから不自然さの指摘が可能である。

テストとしてコ系が用いられている箇所をソ系に置き換えてみると、指示語で聞き手領域を指示していることと「と思う」が共起していることに不自然さはない。

21') そちらに跡がついていると思うので

- 22') そこ、開いていると思うんですけど
 23') そこに折目がついたと思うんですけど
 31') そこに三角形があると思うので
 32') そこに線ができたと思うので

ただし、これが自然な用法となるのは学生が模擬対象者の持つ折り紙の状態について発話する場合であって今回のように自分で持つ折り紙の状態を模擬対象者とともに見ている場面においてはもちろん不自然となる。

IV. 考 察

以上、間接表現「と思う」には語用論レベルにおいて話し手にとって不確実で断定するに足りない知識状態を示すことで聞き手の知識に働きかけ、聞き手の思考・判断を求めるというコミュニケーション機能があり、引用節の内容が話し手自身の領域であっても聞き手に作用領域が及ぶ場合には使用可能であるが、話し手—聞き手ともに共有している現場指示場面においては、話し手の領域にある折り紙をコ系の指示詞で直示的に指示していながら、同時に「と思う」という間接表現で聞き手の領域に働きかけている点が不自然であると考えられた。また、話し手—聞き手ともに眼前でともに知覚している対象の状態について、実際は断定できる内容であるにも関わらず話し手が主張を和らげることは模擬対象者の「(話し手の) 知識を押し付けられたくない、一方的に指示されたくない」というネガティブ・フェイスを過剰に意識した不必要な「ほかし表現」の使用であり、かえって模擬対象者の知覚に問題がないかどうか確認するようなFTAとなる可能性も考えられた。

V. 結 び

医療従事者—患者間の協力関係の構築や情報共有による合意形成のためには医療コミュニケーションの適切化が不可欠であるという認識が広く受け入れられつつあり⁴⁾⁻⁵⁾、医療系専門職養成機関においても学生のコミュニケーション教育が重視されている。その中では誤解を回避する説明の分かりやすさと丁寧さが求められるが、学生にとって情報伝達の効率化と対人的配慮を両立することは容易ではない。例えば言語聴覚療

法の領域では何らかのコミュニケーション障害を抱えた対象者に対してなるべく分かりやすい説明や教示法が必要となる一方で、学生や若い言語聴覚士にとっては多くの対象者は自分よりもはるかに年長者である。このため対象者のネガティブ・フェイスを考慮した過剰なヘッジ表現（ほかし表現）を使用したり、あるいは訓練意欲を高めてもらおうと楽観的すぎる表現や冗談を多用することでポジティブ・フェイスに働きかけたつもりでも結果的に負担や誤解を与え、相手の面子を脅かしてしまうことがあるかもしれない。これはラポールに基づく協力関係の構築には逆効果である。

昨今、医療現場では敬称「さま」や二重敬語などの過剰な敬語表現の使用については、患者側からの「他人行儀で距離を置かれているように感じる」や「堅苦しくて上下関係ができてしまう」という意見が多く見直される傾向にあるが⁴⁾、敬語というカテゴリーに限らず、他者への配慮というポライトネスの視点から効率の良い情報伝達を妨げない程度の配慮表現の使用について検討することが重要であると思われる。本稿で扱った「と思う」のような間接表現についても従来の「正しい／誤った敬語の使用法」という切り口では説明できず、「人間関係を円滑に形成・維持するための他者への配慮としての言葉づかい」という視点からの分析が不可欠である。学生へのコミュニケーション指導では、「会話のスムーズさ」、「適切な言葉づかい」、「対人能力」、「コミュニケーション能力」、「丁寧な言葉づかい」、「平易な言葉」などといった発話評価項目では不十分であり項目の適切化が必要である。このため今後も学生による「過剰な配慮表現の使用により円滑な情報伝達が妨げられる会話」と「円滑な情報伝達を優先しすぎたために対人的配慮が不十分となる会話」について不適切となる理由も含め調査・検討する。

謝辞

会話データ収集に際してご協力頂いた目白大学言語聴覚学科の先生方と学生の皆様に深謝致します。

【文献】

- 1) 常住亜衣子, 石川ひろの, 木内貴弘:「医療面接における医師・患者間コミュニケーションスキル評価尺度: 文献レビューと尺度構成項目の分析」, 医学教育44 (5): 335-344 (2013)
- 2) 三原祥子:「医学系学部におけるコミュニケーション教育はどうあるべきか」, スピーチコミュニケーション教育 第22号, 37-46 (2009)
- 3) 辛昭静, 石崎雅人, 三浦純一: 医療面接における謝罪表現に対する患者と医師の意識. 社会言語科学16 (1), 65-79 (2013)
- 4) 吉岡泰夫, 辛昭静他: 患者-医療者間コミュニケーション適切化のための医療ポライトネス・ストラテジー. 社会言語科学13 (1), 35-47 (2010)
- 5) 吉岡泰夫: 医療コミュニケーション適切化のための社会言語学的研究. 関西学院大学総合政策研究28, 251-253 (2008)
- 6) 入山満恵子, 松田崇, 大平芳則他: ロールプレイを用いた医療面接技術向上への取組み—S T養成の場で求められること—. 明倫歯誌9 (1), 15-26 (2006)
- 7) 高崎裕子, 岡真由美, 田淵昭雄: 視能訓練士教育の客観的臨床能力試験における医療面接評価表の妥当性. 日本視能訓練士協会誌41, 235-241 (2012)
- 8) 喜多慎太郎他: 初診時医療面接における模擬患者と研修歯科医間のコミュニケーション分析. 九州歯科学会雑誌66 (2), 52-64 (2012)
- 9) Brown, P & Levinson, S: Politeness: Some Universals in Language Usage. Cambridge University Press, 101-210 (1987)
- 10) 宇佐美まゆみ: ポライトネス研究のフロンティア: ポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネス理論. 社会言語科学11 (1), 4-22 (2008)
- 11) 三牧陽子: 待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示. 社会言語科学5 (1), 56-74 (2002)
- 12) 三牧陽子: 会話参加者によるFTAバランス探究行動. 社会言語科学11 (1), 125-138 (2008)
- 13) 洞澤伸, 岡江里子: バイト敬語を使う若者たち—話し手の心理と聞き手の印象. 岐阜大学地域科学部研究報告19, 1-31 (2006)
- 14) 洞澤伸, 佐伯麻美: バイト敬語「～になります」の使用場面と聞き手が覚える違和感について. 岐阜大学地域科学部研究報告34, 13-29 (2014)
- 15) 森山卓郎: 文末思考動詞「思う」をめぐる一文の意味としての主観性・客観性—日本語学11, 106-113 (1992)
- 16) 小野正樹: ポライネスからみた「ト思う」について: 一人の作家の談話分析を通じて. 西武文理大学研究紀要1, 43-53 (2000)
- 17) 小野正樹: 「ト思う」叙述文のコミュニケーション機能について. 日本語教育1, 122-171 (2001)
- 18) 小野正樹: 「ト思う」の談話機能—話し方の教育への提案—. 日本語教育法研究会誌6 (1), 54-55 (1999)
- 19) 佐久間鼎: 現代日本語の表現と語法 改訂版, 2-43, 厚生閣 (1951)
- 20) 服部四郎: 英語基礎語彙の研究. 71-80, 三省堂 (1968)
- 21) 金水敏, 田窪行則編著: 指示詞. 151-192, ひつじ書房 (1992)

(2015年10月2日受付、2015年12月3日受理)

On the usage of “to omou” as situational deixis

Takafumi FUCHIDA

【Abstract】

Objective: Recently, in the training and education of physicians and other medical personnel, it is regarded as important to have students acquire “communication skills” or “conversation ability”. However these terms are hard to define. Medical workers in the field of speech—language pathology will require better abilities than other medical workers because speech—language therapy consists of conversations. This paper attempts to consider the function of “to omou,” which is equivalent to the politeness strategy and is the incorrect usage of the phrase.

Methods: We analyzed the function of “to omou,” which students use in conversation from the aspect of the politeness theory of linguistics.

Results: It was revealed that the communicative function of “to omou” is divided into two types: one is related to the positive politeness strategy and the other to the negative politeness strategy. The use of “to-omou” by the speaker is unnatural in a deictic situation with directional demonstratives such as “Kochira” and “Koko” because a psychological distance among a speaker, hearer, and referent is considered as a main factor that decides which of them to use, and the Ko-series can be used only when it is assumed that the speaker recognizes the referent but the hearer does not.

Conclusion: The overuse of hedge will have the opposite effect when attempting to build a better relationship of trust with clients.

Keywords communication skill, politeness strategy, speech—language therapy, hedge